



本年米山梅吉は
生誕150年を迎えました

2019年9月 公益財団法人米山梅吉記念館は
創立50周年になります

理事長就任の ご挨拶

公益財団法人米山梅吉記念館

理事長 積 惟貞 (沼津RC)



昨年9月の理事会において、渡邊脩助前理事長の後任として理事長を拝命いたしました。私自身高齢で健康上も万全とは言えない状態ですが、お引き受けいたしました以上は、全靈をもって任務を全うする所存でありますのでよろしくお願ひ申し上げます。

新任の私にとって先ずやるべきことは、「米山記念館」の認知度を全国に広めることと認識しております。米山記念奨学会と記念館は全く別の法人組織であることをご存じない、あるいは奨学会内の一組織と混同されているロータリアンは少なくありません。過日行われました米山記念奨学会50周年式典では、小沢一彦理事長がご挨拶で、米山梅吉記念館を別法人と強調しつつご紹介くださいました。私どもにとって大変ありがたく感動と感謝をもって拝聴いたしました。

現況下、東京ロータリークラブの創設者、すなわち日本のロータリーの生みの親である米山梅吉の遺徳をしのび顕彰する記念館が、静岡県内米山家本邸跡に存在することを認知いただくことこそが、大切だと思っております。

米山梅吉の生誕は、1868年(慶応4)で、今年は生誕150周年にあたります。当記念館は生誕100周年を記念し先輩ロータリアンの熱意により創立され、来年創立50周年を迎えます。これを機に記念事業を計画し、全国のロータリアンに知りたいと一度は訪れていただこう広報活動を広めなければなりません。

記念式典は2019年9月14日(土)、記念館近くの東レ総合研修センターにおいて催行します。

記念事業も計画しております。その一部は、『米山梅吉物語』(銀の鈴社刊)の発刊。建設後20年が経ち施設のリニューアルや老朽箇所の改修、手狭になった書庫の増設により、米山翁収集の貴重な書籍、ロータリー関係資料を整理、保存。現書庫は、全国から訪館されるロータリアン、米山奨学生、学友などが利用しやすい談話室、研修スペースに改修したいと考えております。企画実現には多額の資金調達が必要であり、皆さまのお力に頼ることとなります。

記念館の運営は、学芸員1名が事務局兼務で常駐し、当2620

地区記念館委員6名と山梨・静岡県内13のクラブから輩出の運営委員24名による奉仕活動によって成り立っています。

来館者には、移動例会のお世話や、学芸員の展示解説、墓参案内など行っており、昨年度は3600余名、120余のクラブが来館されました。

主体的行事は、春・秋の年2回例祭を開催し、式典・墓参・講演・アトラクション・懇親会等を行います。例祭は、全国から120~150余名が集い米山翁の遺徳をしのび、親睦と情報交換の場ともなっています。

生命線である活動資金は、年間およそ1500万円。収入源すべてが寄付金です。固定的なご寄付は、約47%、流動的ご寄付は53%と、半分強が不安定な流動的ご寄附に頼り支えられています。

先人の努力で半世紀、その活動を維持、展開して参りましたが、来年迎える50周年を機に更なる全国的な展開を図り、米山翁とその記念館を広く認知、活用していただくことが重要と考えております。全国からクラブでの移動例会や個人でのご来館など多くの方にお越しいただくためには、設備の充実はもちろん、ソフト面でも改善し、運営要員の増加も急務であると考えております。

運営資金も決して潤沢とは言えず、当地区、近隣ロータリアンのみの力では限りがあり、全国のロータリアンにご協力のお願いをしようと決意いたしました。年間一口3,000円でご支援いただける賛助会員を増やして行くことも具体的な解決策の一つです。全国34地区に広く行きわたっていくことを願っております。

これに加え、創立50周年記念事業もぜひ皆さまのお力を寄せいただき成功させたいと考えており、ご協力をお願い申し上げます。

そして、この米山梅吉記念館が、日本のロータリーの発展と将来像を模索する学問的発信基地と位置付けられるよう、存在意義を高める努力をすることをお誓いして、就任のご挨拶とさせていただきます。

秋季例祭 報告



秋季例祭

日時 平成29年9月16日(土) 午後2時

場所 米山梅吉記念館ホール

●開会前墓参

●講演(2時30分～)

[講師]動物先端医療センター・AdAM

院長／伊藤 博氏(東京農工大名誉教授)

[演題]ヒトと動物の絆

～動物との共生により優しい心を育みましょう～

●懇親会

ロビーにて講師を囲んで、全国からご参加の関係者、ロータリアン140人が一同に会し、米山梅吉記の心に触れ、遺徳の顕彰と情報交換の楽しい一日を過ごしました。



秋季例祭 講 演

ヒトと動物の絆

動物先端医療センター・AdAM
東京農工大学名誉教授

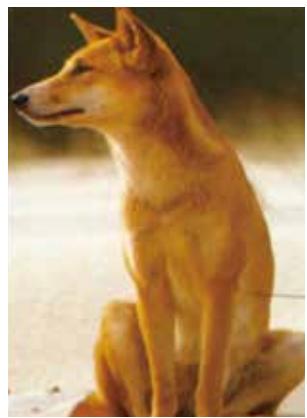
院長 伊藤 博

イヌとネコはいつ頃から ヒトと暮らすようになったの

1万数千年前は、ヒトとオオカミは群れをつくり草食動物を捕らえる狩猟によって生活をしていました。特にオオカミはヒトと同様に群れで狩りをし、アルファーという支配階級により統率されていました。オオカミは狩りに必要な俊敏な足と骨もかみ砕く頑丈な顎と鋭い歯を持ち、遠くの動物の動きを素早くキャッチできる視覚と小さな音も聞き取れる聴覚、獲物のにおいをかぎ分ける嗅覚を持っています。ヒトも知恵を出して協力しながら大きな罠をつくり巨大なマンモスを捕獲するなどヒト

もオオカミも互いの縄張りで狩りを行い互いに尊敬しあっていたのではないかと思われます。しかし、ヒトは狩猟以外に畑を耕し穀物を育てる農耕社会へと変革してきました。さらに、ヒトは畑や穀物などを蓄える「財産」を得るようになりました。また、周囲には獰猛なタイガーなども生息しており財産を守るだけではなく、身の危険を回避しなければならないことから、ヒトは聴覚、嗅覚や鋭い歯を持つ狼を番犬として飼うようになったのではないかと考えられています。オオカミには、ヨーテ、アメリカオオカミ、ニホンオオカミなどが存在していますが、いずれも体毛は長く獰猛な風格を漂わせています。しかし、これらのオオカミと違い、5000年前にイエイスが野生化した

デイントというオオカミがオーストラリアに存在していました。その祖先はインドオオカミであるという説もありますが明確にはなっていません。しかし、熱帯雨林に住んでいたために短毛で顔立ちは他のオオカミとは異なり優しそうな顔立ちで、狩猟をする必要もないことから現代のようにヒトの食べ残しや番犬あるいは寒い時などの暖房にもなるなどイエヌとしての生活をしていました。イエヌとしての祖先ともいわれていますが、野生化したデイントの性格は意外と獰猛でシカなどの大きな動物を倒すほどの力を有しています。



デイント

ヒトとネコの関り

一方、ヒトが穀物を収穫して保存された場所には、多くのネズミが集まり、そのネズミを餌として捕獲するネコもヒトの近くに暮らすようになり、自然とヒトとネコの共存関係が生まれたものと思われます。ネコもイヌと同じようにヒトが畑を耕し収穫した穀物をネズミなどから守るための大切な存在として考えられていました。

このようにイヌとネコは、1万年も前からもヒトと共に存してきた唯一の伴侶動物なのです。



狩猟時代



農耕社会



ネコは穀物を食べるネズミを捕獲するために自然とヒトのいるところに集まってきた。

おそらくネコがヒトと一緒に暮らすようになったのは約5,000年前の古代エジプトのころから、というのが長い間定説とされてきました。当時のエジプトでは、ナイル川流域の肥沃な農地から収穫した穀物を倉庫に蓄えており、それをネズミから守るために猫を飼っていたという説です。3,600年ほど前の絵画に、人間と暮らす様子が描かれていることなどがその根拠として挙げられています。



日本におけるネコとの関わり

日本でも同じように中国から長い航海をする際の大重要な穀物や仏教の經典などをネズミに齧られないように守るためにネコは欠かせないものでした。おそらく飛鳥時代(592~710年)から奈良時代(710~794年)にかけてネコとの共存関係ができていったものと思われます。

イヌとネコの違い

イヌは単独で行動する例もあるが、ほとんど群れで生活をしている。その群れにはヒトの軍隊と同様に厳しい階級が定められ、捕獲した動物を食するにも階級の高いリーダーから低い階級へと配分されています。

他方、ネコは森の中で単独行動するため、自分の身を外敵から守るために様々な知恵を有している。ネコの鋭い爪は獲物を捕獲するためだけではなく高い木に軽々と登り外敵から襲われる危険性を少なくし、獲物が見えやすいという利点もあり、さらにダニやノミなどの寄生も防ぐことができます。さらに、安心して身を置ける暗闇の狭い洞窟などを住み家にしていることが多い。



イヌとネコの機能を知ろう イヌとネコの嗅覚

イヌの嗅覚はヒトの1,000～1億倍も優れていますが、イヌ自身にとってあまり関係のない匂いに対しては極めて鈍感であると言われています。ヒトの嗅上皮細胞の数は500万個程度であるがイヌは2億2千万個もあり、その広さは1,000円札と1円玉くらいの差があります。警察犬として訓練されたイヌは、犯人の残した匂いが薄くなっても嗅ぎ取ることができ、遠く離れてもその匂いを追跡することができるのです。ヒトはこのようなイヌの嗅覚を利用して、麻薬探知犬、爆弾探知犬あるいは違法な海賊版のDVDなどを嗅ぎ分けるための訓練をしています。最近ではがんになると特殊な息を嗅ぎ分けてがんに罹患していることを知らせてくれるがん探知犬もあります。また、猛毒を持つヒアリが日本に上陸してヒトに危害を加えることからテレビのニュースでも取り上げられていましたが、隣の韓国ではヒアリの巣を探すためのヒアリ探知犬が活躍しています。



ヒアリ探知犬

人間社会におけるイヌ達の活躍

他にも頭脳を生かした厳しい訓練を重ねて盲導犬として認定されたエリート犬や災害救助犬、介助犬、火災報知器、電話音、玄関のブザー音、目覚まし時計音などを聞き分けて教えてくれる聴導犬、酸素ポンベを背中に積んでくれる酸素犬などが活躍しています。

このようにヒトとイヌやネコとは1万年前から伴侶として一緒に暮らし、今では家族の一員として認められています。この他にも老人ホームにボランティアの訪問活動としておじいちゃんやおばあちゃんと一緒に時間を過ごしたり、イヌやネコは人間社会と大きな関りを持っています。

伴侶動物への思いやり



私達先端医療センター・AdAMのスタッフも伴侶動物の命を救うために最先端の医療を提供したいと日夜努力をしています。

オリンピック開催まで地域の人達が一丸となって伴侶動物の殺処分0にしましょう。家族の一員である伴侶動物と共に優しい心を育み他人を思いやる地域でありたいと願います。

(一部ネット上の写真使用)



ファミリーヒストリー ～高祖父・米山梅吉について～

教養学部 特殊講義「日本社会研究」レポート
東京大学 文科三類 二年

鈴木 翔



米山梅吉記念館入口



記念館内の
米山梅吉翁像



米山梅吉 少年期

【導入】

「ファミリーヒストリー」というNHK総合テレビジョンにて2008年から放送されているドキュメンタリー番組がある。その内容は、ゲストである著名人の父母や先祖がいかにして人生を送ってきたかを、番組スタッフが関連人物へ取材することで詳らかにしていく、そうして出来上がったVTRを本人が鑑賞するといったものである。このレポートでは、この「ファミリーヒストリー」のゲストを自分とし、さらに本家と比べて稚拙ながら、調査をする者も自分で、それを先生に鑑賞していただくという形をとる。

今回、私が調査対象として選んだのは、母方の高祖父にあたる米山梅吉である。もちろん、直接の面識はないが、三井信託銀行、緑岡小学校（現青山学院初等部）、日本初のロータリークラブの創始者として、歴史に名を刻んだ大人物であるという噂はかねがね耳にしていた。しかし、彼の生涯について知っていることはそれだけであり、長泉町にある彼の記念館も訪れたことがなかった。秘かながらも、自らの直接の先祖である米山梅吉について強い興味を覚えていた私は、このレポートを好機と捉え、彼の記念館を訪れ、彼について書かれた書物を読み、それらをまとめることで、自らのルーツをたどりていこうと考えている。

このレポートでは、まず米山梅吉個人の生涯をその特徴から、少年時代、青年時代、アメリカ留学時代、三井銀行時代、新隠居時代の5つに分けて紹介し、社会貢献の先駆者として彼が行った国レベルの社会活動であるロータリークラブの設立、地域レベルの社会活動として緑岡小学校の設立、故郷・長泉村への貢献を紹介していく。

【米山梅吉の生涯】

1、少年時代

米山梅吉は明治元（1868）年2月4日、東京芝田村町で生まれた。父は、大和高取藩士であった和田竹造、母は、三島大社神官日比谷氏の娘うたであり、梅吉は二人の三男としてこの世に生を受けた。梅吉が5歳のときに父が急逝し、母の実家のある三島へ移り住んだ。8歳で、長兄が教員をしていていたという関係から、長泉村にある映雪舎という小学校に入學し、校長の久我頑量から漢学をはじめとする特別教育を受けた。こうした期待に応え、めきめきと成績を伸ばしていった梅吉は、英才の誉れ高く、12歳のときに400年続く旧家であった米山家の養子に望まれた。梅吉もこれを拒まず米山家に移った。明治14年からは旧幕府創設の沼津兵学校を前身とする私学である沼津中学校に通い始めた。ここで梅吉は、人生最初の師である江原素六に出会う。沼津中学の校長であった江原素六から多大な感化を受けた梅吉は、天性の向学心と文学志向を開花させた。校内雑誌や回覧紙を自ら作り、弁舌を得意とし、当時、東京で発行されていた「穎才新誌」に投稿し、夏目金之助（夏目漱石）らと並んでよく掲載されていたといふ。

2、青年時代

順風満帆といっていい人生であったがここでひとつ、梅吉のなかである疑問が沸き起こった。「このまま米山家の養子として、地方の一地主として、生涯を終えてよいのだろうか。」という疑問であった。この時代、多くの書生が持っていた天下国家の志に梅吉も動かされていた。言論の自由が認められ、国会開設が近づいているといった時勢の中で、梅吉は文筆業を志し、新聞記者として論陣を張って活躍していくことを望んだ。明治16年12月、梅吉はついに広い世界を求めて、米山家に無断で沼津中学を退学し、東京へ出奔した。当時、汽車が通っていたのは東京横浜間のみであり、三日ほどか

けて東京まで歩いた様から梅吉の覚悟が伺える。上京した梅吉は、江南学校に入学したが、その教育水準が沼津中学校以下であったことや、学費のための労働時間により勉強時間が削られてしまうことなど不満点が多く、ほどなく学校を辞め、芝の漢学者、土居光華のもとに書生として住み込んだ。このころ、梅吉はアメリカにある、一定期間働き、一定期間大学で学ぶというスクールボーア制度を知り、心惹かれていく。アメリカへ渡るための資金稼ぎとして、東京府吏員採用試験を受けて合格し、東京府吏員として働き始めた梅吉は、資金稼ぎが終わると、吏員を辞めて語学力を鍛えるために、東京英和学校（青山学院の前身）に入学し、校主の本多庸一と出会う。本多は日本キリスト教界の指導者として活躍した人物で、梅吉生涯の師となつた。この間に、出奔を機に悪化していた米山家との関係も改善していき、明治20年、正式に米山家に養嗣子として入籍した。



米山梅吉 青年期

3、アメリカ留学時代

翌明治21年、梅吉はついに念願の米国への留学へと旅立つ。サンフランシスコの日本人経営の福音会に身を寄せた梅吉は、まず大学に入る準備をするための高等学校であったカリフォルニア州のペルモント・アカデミーに入学し、その後、ウェスレян大学で修士号（マスター・オブ・アーツ）を獲得し、シラキュース大学で法学を学んだ。苦学生であった梅吉は労働の必要もあり、卒業には、通常かかる年月の倍の期間を要し、滞米期間は8年間にも及んだ。当時の一般的な書生と同様に、梅吉もいかにして国を治め、安定した国家運営をしていくかということが最も重要な関心事であり、これという専門の勉強はせず、政治をかじり、文学を味わい、といったように様々に見聞を広め、日本に帰ってからの新聞記者としての仕事に活かそうと考えていた。日清戦争が終わった明治28年、梅吉は長期にわたる在米生活を終え、ついに帰国した。



梅吉がアメリカで
学位を授与される際に
着用したもの

帰国後、長年の願望であった新聞記者になるため、方々をあたっていた梅吉であったが、その狭き門と報酬の乏しさという現実に直面する。この頃、梅吉は友人の一人から晩年の勝海舟を紹介され、彼の元へ出入りを始めていた。梅吉は依然として文筆で生きていく決心をしていたため、勝海舟のもとで維新史を研究して本を書くつもりであったという。また梅吉はアメリカで、嘉永6年に黒船を率いて日本に開国を迫ったペリーについて、その米国復命書などを元に書き上げた憂國の書である「提督彼理（ペリ）」という一冊の本を書きあげており、その題字を勝海舟にお願いしている。この本は、当時最も大きな出版社であった博文館より出版され、相当な売れ行きを示したという。この本が出版された年である明治29年に梅吉は結婚した。当時は、文筆だけではとても世間並の生活ができる時代ではなく、いざ所帯をもつとなると、梅吉は文筆で生活を立てることを諦めざるを得なかった。



著書
「開國先登提督彼理全」

4、三井銀行時代

結婚し、生活費を稼がなければならなくなつた梅吉は、旧友の紹介で当時英語のできる人を求めていた日本鉄道会社にひとまず入社した。しかし、俸給は低く、役目は軽く、将来の出世見込みも全くないといった待遇に耐えかねた梅吉は、井上馨を義父にもつ旧友の藤田四郎に相談し、井上の推薦を受け、三井銀行への入行を果たした。30歳で銀行員になるという極めて遅いスタートであることに加え、在米中も実業方面の教育を少しも受けていなかつた梅吉は、銀行や金融に関する書物を読み漁り、遅れを取り戻そうとした。こうして、まもなく頭角を現してきた梅吉は、入行後わずか10ヶ月の明治31年7月には神戸支店次席となり、同年8月には、池田成彬、丹幸馬を同行として、銀行業務取調のための欧米出張を命じられるなど、異例の出世を遂げた。帰国後、彼らがまとめた「三井銀行欧米出張員報告書」は、三井銀行内だけでなく、外部からも分与の申し入れが殺到し、今日の日本の諸銀行の実務のあり方は、この報告書によって改善されたといわれている。その後も梅吉は、期待と信頼の中で、破格の栄進を続け、明治33年の大阪支店長代理をはじめとし、大津、横浜、大阪支店長を経て、明治42年には、42歳という若さにして、三井銀行常務取締役に就任した。



米山梅吉
三井銀行時代

大正2年には、英仏米の資本家と協議をし、このときの梅吉の意見を参考として、三井銀行に為替を扱う外国課が新設された。さらに大正6年には、日本帝国政府特派財政経済委員として米国に赴く



三井銀行幹部
(右上が梅吉)



米山梅吉
52歳の時

など、経済界の重鎮として梅吉の発言と行動は重みを増していった。公的にはこのうえないほど順調であった梅吉であったが、私生活においては、長男の急逝、次男の夭折という災難が続き、後継ぎは私の曾祖父にあたる米山桂三ただ一人となっていた。三井銀行に入り、25年にわたり勤続していた梅吉は大正12年、55歳の時に常務取締役を辞任し、第一線から退いた。

一線を退いた梅吉であったが、これからの日本経済における信託業務の重要性をいち早く見抜き、大正13年に日本初の信託会社である三井信託株式会社を設立し、初代社長となった。信託とは、財産をみずから管理、運用する能力やその時間的余裕の無いものが、信頼できる他人にその財産の管理、運用、処分を委ねるといったものである。梅吉はラジオ放送で次のように述べている。「肉体の病気を治すには医術があり、精神の煩悶を救うには宗教がありますが、さらに法律と関連して複雑になった経済問題を救うに当たり、我々の顧問ともなり良友ともなるべきものが、即ちこの信託制度なのです。」梅吉は信託業務の根本精神を適正な利益を収受し、その他はすべて顧客、社会へ還元するというものだと考えていた。

昭和9年に三男・桂三が結婚すると、子を育てる責務を果たしたと考え、三井信託株式会社社長を退任し、財團法人三井報恩会の理事長となった。こうして梅吉は自らの信条である「新隠居論」を実行に移していく。

5、新隠居時代

梅吉は47歳という働き盛りの年に「新隠居論」という考え方を発表している。これは、年をとった者たちの社会への新たな貢献の道を提示したものである。以下、梅吉が実際に「新隠居論」(大正3年)で論じている内容を引用する。「日本では、隠居というと、全然世の中から隠れてしまうことを意味する。それで未練が残り断行が鈍くなるが、西洋の隠居はその為め世の中と没交渉になるのではなくて、隠居として為すべき仕事を見つけ出す。日本人も隠居を樂隠居の意味に解せず、西洋に学ばなければならない。隠居した人は今まで職務に忙しくて出来なかったことが残っている。それは人間として全くすべき義務である。」梅吉は老人がそれまでの人生で培った経験、ノウハウを生かすことができる新天地として、公益事業を挙げ、「その名誉と信用に加うるに貴重な経験をもってし、大いに公益事業の世話を焼いてもらいたいのである。」(新隠居論)と語っている。実際に梅吉も自身の言葉の通り、昭和9年に戦前・戦後を通じて最大規模の助成財団である三井報恩会の理事長となる。三井報恩会の助成規模は当時のお金で毎年度100万～200万円に及び、これは現在の価格に直すと数十億円を上回る。その主な事業活動は、ライ病(ハンセン病)患者のための療養所の設立、がん治療・結核治療研究の助成、国民健康保険制度法制化の促進、常設託児所・育児院の新設、養老院の新設・拡充、農村振興機関の助成など多岐にわたった。

「他の人が喜んでいる顔を見るのが一番の幸せである。」と語ったという梅吉は他にもロータリークラブの創設や小学校教育の充実のため自費を投じて、緑岡小学校を建設するなど信条に従った社会活動を繰り広げたが、これは後に詳しく説明する。

このように、新隠居時代も盛んな活動を見せていた梅吉であったが、昭和18年、前立腺肥大という病気にかかり、以後これを持病として苦しい日々を過ごし、太平洋戦争の戦況の悪化とともに、梅吉の病状も悪化の一途をたどった。貴族院の勅撰議員としても活躍していた梅吉であったが、病をおして終戦国会に出席したことが、病気をさらに悪化させ、ついに、昭和21年4月28日、故郷長泉村下土狩の別荘で梅吉は永遠の眠りについた、享年は78歳であった。こうして明治の始まりから太平洋戦争の終わりまでの怒濤の時代を、自らの使命を全うしながら生きた梅吉の生涯は幕を閉じた。

ここまで米山梅吉の生涯について概説してきたが、最後に、梅吉の地域、国との関わり方の例として、地域レベル、国レベルでの社会活動をそれぞれ紹介していきたい。

【地域レベルでの社会活動】

梅吉は、幼少期を過ごした長泉村(現長泉町)に対して、大きな恩返しを行ってきた。大正12年に

は、教育基本金として村に対し、当時の金額で3000円を寄付し、また日本が大不況にあえいでいた昭和6年には、長泉小学校に図書館と約千冊の本を寄贈した。これらの本は「米山文庫」と呼ばれ、子供たちを中心に地域の人々が広く利用した。現在でも、米山記念館の横に、「こども図書館」という形で米山文庫は存続しており、地域の子供たちによって利用されていた。また生涯の師である本多庸一と出会った母校である東京英和学院に対しても、強い愛校心を持っており、長年にわたって校友会会長を務め、自ら率先して寄付を行い、学院を財政的に援助した。さらには、かねてから小学校教育の重要さを痛感していた梅吉は青山学院の附属小学校の建設を申し出、その一切の建設費用を負担し、昭和12年、緑岡小学校を開校させた。自ら校長に就任し、子供たちに聖書の言葉を読み聞かせ、他人を思いやること、誠実であることなどを説いて、正しく伸びやかな人間教育を目指した。



記念館に併設されている
米山文庫とその館内

【国レベルでの社会活動】

梅吉の社会活動の代表例として真っ先に挙げられるのが、日本初のロータリークラブの設立であろう。日本ロータリークラブが発行しているパンフレットによると、ロータリーの定義は、「人道的な奉仕を行い、あらゆる職業において、高度の道徳的水準を守ることを奨励し、かつ世界における親善と平和の確立に寄与することを目指した、事業および専門職務に携わる指導者が世界的に結び合った団体」である。経済恐慌ですさんでいた1905年のアメリカ・シカゴで誕生したロータリークラブは、「利己のない奉仕」をモットーに、世界中に広まり、現在、世界155か国に28134個のクラブが存在し、総会員数は120万人にも達する。

梅吉は、三井銀行の重役であった大正6年に、特派財政経済委員としてテキサス州ダラスを訪れており、ここで、三井物産ダラス出張所所長であった福島喜三次よりロータリークラブなるもの的存在と趣旨を知った。すでに、「新隠居論」を著し、社会奉仕の大切さを唱えていた梅吉は、その運動に深く共感し、日本への導入・実践を推進した。こうして、大正9年に日本で初めてのロータリークラブが東京に設立され、梅吉は初代会長に就任した。その後ロータリークラブは、戦争により一度は閉会の憂き目を見たが、消滅することなく、戦後さらなる発展を遂げ、現在では、北海道から沖縄までクラブ数2272、会員数9万人の規模を誇っている。

さらには、ロータリークラブに対する梅吉の貢献をたたえるものとして、ロータリー米山奨学会が設立され、民間最大の奨学財團として、私費留学で来日し、日本の学校に所属している外国人に対して、奨学金を支給し、手厚いサポートを行っている。

【結び】

このレポートを通して、初めて米山梅吉という自らの先祖と向き合ったが、その数えきれないほどの功績とともに、何よりも驚いたのが、彼の他人に奉仕することに喜びを覚える精神であった。梅吉は養家から出奔し、自力で、東京で生活し、さらには当時としては異例のアメリカ留学まで成し遂げてしまう。そこには、他者の協力はもちろんあつただろうが、他の留学生と比べると恵まれていない環境であったといえるであろう。自分自身の力だけでここまで成し遂げたという自負があつてもいいはずだ。しかし、梅吉は驕ることなく、あくまでもその後の自身の成功を他者に還元することを考え続けた。まるで自分の人生が他者に尽くすために存在しているかのようである。その精神性の源流を「汝、他人より受けんと欲するものは、汝もまた他人に然かせよ。」という姿勢のキリスト教的教育に求めることは自然であるが、私はなによりも彼が生まれ持った、そして成長していくなかで恵まれた多くの師によって醸成された人間性にあると考えている。とにかく、日々利己的に自分中心で生きてしまっている自分にとっては、尊敬こそれ理解しがたいほどの見事な人間性である。自分がこの偉大なる人物の血をわずかながら継いでいることを誇りに思うとともに、自らの日々の生活・考え方・価値観を再考するための良いきっかけとなつた調査であった。



米山梅吉
ロータリークラブ

【参考文献】

「社会貢献の先駆者 米山梅吉」戸崎 肇著 芙蓉書房出版
「点描 米山梅吉 日本のロータリークラブと信託業の創始者」谷内 宏文著 新風舎文庫米山梅吉記念館内の展示
レポート中の画像はすべて、記念館内の展示を許可を得て撮影させていただいたものを編集して、使用している。

マンガ 「日本ロータリークラブの父 米山梅吉ものがたり」 制作の経緯について

RI第2700地区
地区青少年奉仕委員長
田村 志朗(福岡東RC)



▶ インターアクトとの出会い

2010年1月、お世話になった方からのご紹介で福岡東ロータリークラブへ入会いたしました。

当時、年齢が比較的若いということもあったのでしょうか、当クラブが提唱している中村学園女子高等学校インターラクタクラブの担当委員会へ配属されました。はじめて彼女たちの活動を目にしたとき、大きな感動を覚えたのを今でも思い出します。その翌年には地区インターラクタ委員会への出向依頼があり、入会以来8年、インターラクタをはじめとする青少年奉仕部門へずっと携わって参りました。

▶ 青少年達とロータリー

これまで青少年奉仕活動を支援してきて分かったことは、彼・彼女らは日々の奉仕活動については大変熱心なのですが、ロータリーの歴史やその精神についてはほとんど知らずして活動を行っているということです。そのせいもありましょうか、ある一定期間の活動後は卒業てしまい、ロータリーの元へ戻ってくる青少年達は決して多くはないのが現状でもあります。

▶ ご縁のきっかけを大切にしてほしい

当地区の青少年達へ毎回お伝えしておりますのはご縁の大切さについてであります。ロータリークラブというご縁のおかげでインターラクタやロータークラブ、国際青少年交換の方々は活動を行うことができるのです。であれば、ロータリーは誰がつくったのか？ 世界にまでなかなか目を向けるのが難しいのであればせめて日本にロータリーを紹介してくれた人は誰なのかを知ってほしいのです。

▶ 青少年達における米山梅吉先生の認知度

日本ロータリーを創ったのは誰だか知っていますか？

この質問を何度か青少年達へ投げかけたことがあります、大変残念なことに米山先生のお名前が出てくることは今まで経験したことありません。

ロータリークラブでは米山記念奨学委員会がありますので、米山先生の認知度は高いのですが、ロータリーファミリーであるインターラクタ、ロータークラブ、国際青少年交換といった青少年達における米山先生の認知度の低さはいったいどういうことなのでしょうか。

▶ 知られていないことは存在しないことと同じ

「知られていないことは、存在しないことと同じである」。この言葉はアップル創業者であるスティーブ・ジョブズがiPhone発表時に語った言葉であると言われています。

私は米山先生の偉業が青少年達に知られていないことを大変残念に思いますと共に、では、知つてもらうためにどうすればいいのかを行動しなければならないと思い至るようになりました。

▶ なぜマンガなのか？

米山先生関連の書籍は沢山出版されていますが、中学・高校生向けに作られた米山先生の伝記は無いのだろうか。そう思い、文献資料を探してみたものの中高生向けの手軽な書籍がなかなか見つかりません。たまたま当方の職業分類が図書出版でありますことから、米山先生の事を分かりやすく子ども達へ伝えることも職業奉仕の一環なのかもしれない、そう思うように

もありました。考えあぐねた末、子ども達に知つてもらうにはマンガを活用するのが一番ということから、マンガ「日本ロータリークラブの父 米山梅吉ものがたり」制作プロジェクトを立ち上げることにいたしました。

以上、大変ざっくりとではありますがマンガ本制作の経緯についてお話しさせていただきました。あくまでも青少年達に米山先生の事を知つてもらうということを第一義としておりますので、ダイジェスト版としての分量に抑えていますが、読み応えも十分あるのではないかと思っています。

このマンガの発刊によって、一人でも多くの青少年達が米山先生の事、そしてロータリーの事に興味を持つてください、それがきっかけとなって世界に羽ばたく人財となってくれることを願つてやみません。



マンガ
「日本ロータリークラブの父
米山梅吉ものがたり」

発刊予定日 2018年3月1日
A5判／32ページ
予価 500円+税
発行所 株式会社梓書院

「米山梅吉翁」 人物写真集 について 大川 孝昭



米山聰氏と大川氏

私と米山聰さんは、職場の同僚でした。聰さんの方が年上で年齢は離れていましたが、気のあう仲間でした。聰さんの実家は、米山梅吉さんの養父藤三郎さんの弟熊吉さんの家で、聰さんの家は梅吉さんの家の分家にあたる、という話を時々聞いていました。私も長泉在住で米山梅吉さんの名前だけは知つていましたが、特に関心も持たないままおつきあいをしていました。

ある時、米山聰さんから「梅吉さんが東京に出る時、自分が持っていた掛け軸や茶道具などを熊吉さんに預けたらしいが、我が家にこの品々が残っている。これらを紹介しながら梅吉さんの写真集を作ろうと思うのだけれど、手伝ってくれないか」と声をかけられました。私は写真を撮ることに興味があり、米山梅吉といつも名前を知っている程度だったので、より深く知るきっかけになる。ロータリークラブも全国に2000以上あるらしいので、メンバーの方に梅吉さんの名前だけでなく、その精神を理解してもらうのに、文字を読むだけではない写真集はよい資料になる、と思い「いいですよ」引き受けました。当時二人はまだサラリーマン生活をしていたので、写真集といっても仕事の合間で作るということは、そんなに大がかりなものではないだろう、と考えていました。

こうして写真集作成が始まりました。聰さんが綿密な計画を立てました。年代毎に梅吉の資料をあたり、それがどこに保管されているのか、どうすれば写真を撮らせてもらえるかを調べて、仕事が休みの日に二人で出掛けてきました。私は自分のカメラだけでなく、知り合いのカメラ屋さんに頼んで当時数十万円した最新鋭のカメラを借りて、現場に行きました。当時は、現像してみなければどんな写真が撮れているのか確認できません。同じものを何回か撮りましたが、シャッターを押すときは毎回緊張しました。撮った写真を聰さんに渡して解説文を書いてもらいます。このチェックも3、4回は行ないました。目の前に今あるものを撮ることだけでなく、歴史を感じられるようにできないかと工夫もしました。例えば反射炉の写真是、現場に行って撮ることはもちろん、古い写真はないかを探して対比させて掲載するようにしました。

現在、米山記念館の理事長室に掲げられている梅吉さんの肖像画は、白滝幾之助画伯によって描かれた2代目ですが、これより先に、同じ白滝画伯によって描かれた梅吉さんの肖像画が三井銀行にあるらしい、という情報を得て三井銀行本店に行つたこともあります。しかし残念ながら本物は見つからず、絵はがきになったものを写真に撮りました。現在記念館にあるものとは梅吉さんの顔の向きが違うので、別の時期に描かれたものと推測されます。

写真だけではありません。巻頭に言葉を書いていただく方は誰がよいのか。幸い聰さんがロータリークラブのメンバーだったので、その人脈からピックアップして、直接ご本人に依頼をしました。出版元は沼津の会社に決まりました。表紙を決めるのにも時間がかかりました。色は、素材は、題字は…。討議を重ねた

末に出版社の社長が「ちょっと値段がはるけれど」と言って持ってきたのは、落ち着きのある茶系の布でした。これは値段が高くても見栄えのするものを作りたい、という私達の思いにぴったりくるものでした。この茶系の布には金の字がよいのでは、との表紙の形に決まりました。この表紙は自分でもよい出来だと思っています。

平成9年4月、梅吉翁50回忌にあわせて写真集が出版されました。結局、完成までに足かけ12年、総費用1300万円くらいかかりました。これには私と聰さんの退職金もすべて注ぎ込まれています。出版当時の定価は18000円ですが、これはほとんど原価に近い金額でした。正確な数を覚えていませんが、2000冊くらいつくったと記憶しています。

本が形になると、聰さんはチラシ作りにも取りかかりました。出版の際に取材をうけた新聞記事も取り込み、カラーでわかりやすいチラシができました。写真集が完成したとき、聰さんは郵便局を営んでいらしたので、発送用の専用の箱まで用意して、郵送の手間も軽減するようにしました。実際の写真集はB4版460ページ、重さも2kgと書籍としてはかなりのボリュームがありました。しかし、ここに至るまでの聰さんと私の活動の経緯をたどると、本の重たさ以上の価値があると今でも思います。

雪の降った朝、聰さんから連絡がはいり、「雪景色がきれいで墓所で一緒に写真を撮ろう」と誘われました。なるべく足跡をつけないように遠回りをして墓所の前に立ち、二人で写真を撮った時のことは忘れられません。

この写真集は、長泉ゆかりの米山梅吉という人物を幅広く知っていただく為に、長泉町内の小中学校及び図書館、静岡県立図書館、国立図書館へ贈呈しています。

今後も、この写真集が梅吉さんの心を学ぶ一助となることを願っています。



B4判／横型／特製布貼り表紙
題字他金箔押し仕上げ／総ページ460ページ
15,000円(消費税別)



米山梅吉生誕150周年 春季例祭

お知らせ

多くの皆様のご来館をお待ち申し上げております。

[日時] 平成30年4月21日(土)午後2時～ ●開会前墓参

[場所] 米山梅吉記念館ホール

●講演(2時30分～)

[講師] 銀の鈴社

柴崎 由紀氏

[演題]『米山梅吉 その時代と人々』

～伝記刊行のための取材報告～

●アトラクション

パントマイム

山田 とうし氏

●懇親会

登録料無料

ロビーにて講師を囲んでの懇親会
多くの皆様のご参加をお待ちしております。

米山梅吉記念館のご案内

新幹線三島駅よりタクシー5分
東名沼津ICより15分

[開館時間] 午前10時～午後4時

[休館日] ●月曜日

●12月28日～1月4日

●整理のための休館日(5月・8月の特定日)

米山梅吉記念館 館報

Vol.31 春号

発行日／平成30年3月15日

発行者／公益財団法人 米山梅吉記念館 理事長 積 惟貞

〒411-0941 静岡県駿東郡長泉町上土狩346-1 TEL(055) 986-2946 FAX(055) 989-5101

URL <http://yoneyama-umekichi.jp/> E-mail yumh@ai.tnc.ne.jp